

だんおりてきて、それを行るところで、下からの塵いを
吸いあげて上へ持っていく所ではないような気がした。
やはり、霞ヶ浦の汚染を一番心配するのも憂うのも、私
達市民と、この湖によって飲料水を得、生活の資を得て
いる人々であると思う。

水をきれいにしていたくのを待っていては、いつま
でたってもきれいにならない。水を汚さないよう自発的
に気をつけると共に、そのための要求はどんどん出して
いかなければならないと思った。 (主婦)

無き霞ヶ浦にささぐ詞

大 木 光

私は、多くの人が水に注意をはらわない理由には、次
の二つがあったと思うのです。

(一)つは、水が豊富にあり過ぎて、その存在が透明すぎた
事。

(二)つには、飲料水としての水が、源は雨だったり、河の
水だったり、湖の水であつたりするにも拘らず、魔法

をかけられたように、いつでも蛇口から水がほとばしり
出て、降って湧いたとしても思われた事などです。

水を例えて空気のような存在だという人がいるけれど
空気が亜硫酸ガスで汚染されている昨今をみればわかる
ように、人間は水に関して、水によって決定的な破壊
に追いやられるまで、自分達をふり返えることがないの
だと思えるのです。水に関するエピソードを、人類はい
くらでも持っています。人類はひどく簡単に、水とい
う聖域を汚してきたとは言えないでしょうか。

昨年、昭和四十八年初夏、平たいお盆のような西浦の
爪先の入江から、二隻の舟が中央に出て、土浦港に帰る
うとしています。この二隻は、茨城大農学部霞ヶ浦研
究班の手配したものでした。一隻には、湖全域で採水さ
れた試料が満載されていました。同舟したのは、私が所
属している研究室の高村先生や、相棒の本郷君、諸先生
でした。

私は、一昨年からの人達と霞ヶ浦を直かに見る機会
を多く得たのです。そして、その時々、自然というも
のに対して、かつてない独特な感動を味わったものです。

自然と対面した時、自然そのものから受ける迫力や
大きさや崇高さを……私はよく覚えていきますよ。